人文地理学研究　30　41～68　2006

カナダの地域性

田　林　　明

Ⅰ　はしがき
Ⅱ　地理の教科書におけるカナダ
Ⅲ　カナダの一般的性格
　Ⅲ－1　領域と自然環境
　Ⅲ－2　歴史的背景
　Ⅲ－3　人口構成と社会・経済
　Ⅲ－4　地域格差
　Ⅲ－5　南北と東西の方向に働く力
Ⅳ　カナダの地域性
　Ⅳ－1　1つの国，多くの地域（J. L. Robinson, 1989による）
　Ⅳ－2　複数の地域からなる国（R. M. Bone, 2005による）
　Ⅳ－3　カナダの地域主義とカナダの統合（J. Warkentin, 2000による）
　Ⅳ－4　地域主義とカナダ列島（R. C. Harris, 1998による）
Ⅴ　むすび

キーワード：カナダ，地誌，地域性，地域主義，カナダ列島

Ⅰ　はしがき

現代社会では国際化や情報化が進んでいるにもかかわらず，世界の人々の生活形態や社会，自然などに関する系統的な知識の整理は遅れており，それらが多くの国際的な問題を引き起こす1つの原因となっている．本報告は，カナダ地誌の作成をめざす第一歩として，カナダの地域性について検討しようというものである．

地理学の基本的な目標の1つは，その自然的・人文的性格を正確に記述し，分析し，解釈することによって，変化する世界を理解しようとすることである．地域の人文的側面と自然的側面の両者を考慮することによって，われわれが住む世界に対する総合的なアプローチの仕方を地理学者は発展させた．地誌は1つの地域に関する様々な知識の寄せ集めではない．ある地域の性格や発展傾向を確認するための情報を選択する直感を養い，それらを記述するための技術をみがくものである．地誌はある地域の顕著な事実の分布パターンを記述し，解釈するが，記述される事実はニュートラルでなければならない（Robinson，1989）．

地理学は対象によって定義されるわけではなく，情報の選択，再構成，そして解釈の仕方によって地理学的であるかどうかが決まる．歴史学者が現象を時間の流れを通して分析するのに対して，地理学者は現象を空間的脈絡で捉えようとする．地理学的研究の特徴は，自然と人間の関係，地域の景観，分布パターン，そして地理的パターンの変容という視点から分析を進めることである．

カナダを取り上げる理由としては，隣国のアメリカ合衆国があまりにも巨大であることもあって，日本では極めて情報が不足しているか，偏ったイメージが定着しているということがまずあげられる．特に，日本では地理学者によって系統的にまとめられたカナダ地誌は極めて少ない．これまで

の地誌では，アングロアメリカもしくは北アメリカの一部として取り扱われることが多く，しかもアメリカ合衆国と比較すると記述される量ははるかに少ない．例えば，石田龍次郎編（1959）：『現代地理体系第三部 世界地誌第七巻北アメリカ』では，アメリカ合衆国の記述は150頁であるのに対して，カナダについては37頁が割かれているにすぎない．渡辺　光編（1980）：『世界地理13 アングロアメリカ』ではアメリカ合衆国の部分が229頁に対してカナダの部分は121頁である．さらに正井泰夫（1985）：『アメリカとカナダの風土－日本的視点－』では，最初の58頁では北アメリカ全体の自然環境や民族の歴史と人口について記述され，次いで58頁がアメリカ合衆国に，20頁がカナダに割り当てられている．1983年に発行された『週間朝日百科世界の地理』では，アメリカ合衆国に7冊があてられ，カナダについては2冊であった（山口，1983a，1983b）．多くの場合，アメリカ合衆国の一地方程度の取り扱いにすぎない．2001年の統計によると，アメリカ合衆国に対してカナダは，人口では10分の1，国民総所得では14分の1にすぎないことを考えると，地誌におけるこの程度の取り扱いは妥当かもしれない．しかし，カナダはアメリカ合衆国と密接な関係を保ちながら存続してきた北アメリカを構成する2つの国民国家の1つであり，国土面積ではアメリカ合衆国を凌駕することを考えると，これまでの取り扱いは不十分に思われる．しかも，内容的にもカナダについては自然環境や天然資源，第一次産業に関する記述が重視される傾向がある．地理学者がカナダを単独で扱った数少ない例として，島崎（1994）によるものがあげられる．これでは，むしろ歴史的視点が強調されており，一般の地誌とはやや性格を異にしている．

カナダを取り上げるもう1つの理由は，カナダは面積は広大であるが，人口は日本の4分の1にすぎず，先住民族の部分を除くと歴史は400年ほどであり，自然環境が厳しいこともあって，地域の様々な現象が明瞭な形であらわれ，また，その起源や要因を探ることが比較的容易であることがあげられる．大国のアメリカ合衆国に隣接し，国際的な軋轢のなかで発展してきた先進国であるため，様々な特徴的な事象があり，また日本よりも時代を先取りした現象が多い．すなわち，カナダ地誌の検討は，地誌学的研究のモデル的な意味をもっており，将来その枠組みや記述・分析の手順を，より地理的事象が複雑な日本やアジア，ヨーロッパに応用することが可能であろう．

ところで，ハーツホーン（1957）をはじめとして多くの地理学者が，地誌学は地理学研究のなかでも中心的な地位を占めるものと主張しているが，地誌学に正面から取り組んだ研究は必ずしも多くなく，特に日本では研究の蓄積は少ない．変動する現代において，地域の実態を系統的に整理し，これを踏まえて次の時代を見通す試みがますます必要になっている．その際に，地誌学の方法論的な枠組みを構築するばかりではなく，それに基づいて具体的な形での地誌を提示することが重要である．カナダではこれまで多くのカナダ地誌が発表されてきた．伝統的には自然的基盤と人間活動のかかわりの違いから，カナダをいくつかの部分地域に区分し，カナダ全体と部分地域の性格をそれぞれの事項を記述・分析することから明らかにする手法が多かった．Warkentin（1968）やPutnam and Putnam（1979），Robinson（1989）などはこのような立場で，優れた地誌を発表している．また，McCann（1982）は核心地域と後背地域という枠組みでカナダを捉えようとし，Borne（2000）は中心地域と周辺地域，イギリス系住民とフランス系住民，中央主義と非中央主義，先住民と非先住民といった対立軸を手が

かりにカナダの性格を明らかにしようとした．この報告では，これらの既存の成果を活用しながら，まずは，カナダ全体の性格について検討することにしよう．

最初に現在日本で用いられている高等学校の地理Bと中学校の社会科地理的分野の教科書の記述を手がかりに，カナダがどのように捉えられているかを整理し，そこで示されたカナダの性格について，多面的な側面から検討することにしよう．これを踏まえて，最近のカナダにおけるカナダ地誌の成果から，カナダの地域性について明らかにする．

Ⅱ　地理の教科書におけるカナダ

カナダという国はどのような特徴をもつ国であろうか．隣接するアメリカ合衆国とはどのような点で異なっているのであろうか．カナダに関する日本人のイメージは，比較的類似しており，それは中学校や高等学校の地理の教科書や旅行のガイドブックの記述などからも理解することができる．しかし，現在使用されている高等学校の教科書で，カナダを取り上げているものはほとんどない．それは1994年度から学年進行をもって実施された学習指導要領では，「世界の諸地域を網羅的に取り上げることはせず，三つ程度の地域を選んで取り上げること.」となっているからである（文部省，1989）．さらに，1999年に改訂され2003年から年次進行により実施された高等学校指導要領でも，「地誌的にとらえる視点や方法を学習するのに適した二つまたは三つの地域を事例として選び」，市町村規模の地域と国家規模の地域そして州・大陸規模の地域という３つの規模の地域を，それぞれ多面的・多角的に考察することになった（文部科学省，1999）．このことから，カナダを地誌的に取り上げようとする教科書はなくなってしまった．

第１表は2003年もしくは2004年から用いられている高等学校地理Bの教科書の中で，カナダに関してわずかでもふれられている事項と，取り上げられた市町村と国と大陸の規模の地域を整理したものである．帝国書院発行の２冊の教科書は，カナダに関する記述は少ないが，現代世界の地誌的考察にあたって市町村規模の地域の事例としてバンクーバーを取り上げたのが東京書籍と二宮書店の教科書であり，現代世界の諸課題の民族，領土問題の地域性の事例としてカナダの多文化主義を取り上げたのが教育出版の教科書である．国家規模の地域については，アメリカ合衆国とオーストラリアが３冊で取り上げられ，インドが２冊，日本と韓国，中国，インドネシア，トルコ，ブラジル，ペルーが１冊で取り上げられている．韓国や中国，ロシアは近隣諸国としていずれの教科書でも詳細に取り上げられている．他方，州・大陸規模の地域ではすべての教科書でヨーロッパが扱われ，東南アジアが３冊で，北アメリカもしくはアングロアメリカとオーストラリアが２冊で，アフリカと西アジア・中央アジア，アラブ諸国がそれぞれ１冊となっている．

教科書全体としては，世界のすべての地域が何らかの形で取り上げられるように工夫されているが，カナダに限ってみると記述が少ない．カナダは国家規模の地域の事例としては取り上げられず，大陸規模では北アメリカでわずかに触れられるのみになっている．ただし，神戸市や横浜市との対比でバンクーバーが取り上げられ，その中でカナダ全体の性格にも触れられている．また，バンクーバーを事例とする東京書籍と二宮書店の教科書では，いずれも北（アングロ）アメリカが取り上げら

第1表　高等学校地理Bの教科書におけるカナダの記述

教科書	カナダに関する事項	取り上げられた地域		
		市町村（分量）	国（分量）	大陸（分量）
矢田俊文ほか(2003)：『地理B』東京書籍	楯状地，ツンドラ（写真），石炭生産，石油生産，天然ガス生産，銅鉱生産，木材輸出，狩猟・採集民イヌイット，市町村規模の地域－バンクーバー（7頁，高緯度，フィヨルド，木材・鉱産資源，国際貿易都市，ウオーターフロントの再開発，国際会議，人口増加，多様な人種と民族，日本との関わり，日系移民，日系カナダ人の強制移住），フランス人による開拓，イギリス系住民とフランス系住民，多文化主義，多民族社会，移民の受け入れ，ケベック南部と五大湖周辺の酪農地帯，油田地帯，五大湖周辺の大都市圏への人口・経済の集中と地域格差，都市化による農村の変容，北アメリカ自由貿易協定，石炭生産，水力発電，酸性雨，農産物の輸出	神戸（7頁） バンクーバー（7頁）	オーストラリア（10頁） インド（10頁） 日本（14頁）	東南アジア（10頁） ヨーロッパ（10頁） 北アメリカ（10頁）
竹内啓一ほか(2003)：『地理B 世界をみつめる』教育出版	楯状地，多文化主義政策，海外への融資援助，北米自由貿易協定，多文化主義をめざすカナダ（4頁，かえでの国旗，フランスの植民地からイギリスの植民に），英仏系住民の対立，五大湖周辺への主要都市と工業地域の集中，ケベック州の独立運動，移住者，先住民族）	丹那盆地（6頁） 鯖江市（6頁）	アメリカ合衆国（10頁） ペルー（6頁） インド（8頁）	ヨーロッパ（12頁） アフリカ（14頁） オセアニア（11頁）
高橋　彰ほか(2003)：『詳細地理B最新版』帝国書院	楯状地（写真），ニューファンドランド沖の大陸棚，アメリカ合衆国との国境，北米自由貿易協定（NAFTA），食料輸出	奈良市（5頁） キャンベラ（3頁）	韓国（8頁） オーストラリア（10頁） アメリカ合衆国（12頁）	西アジア・中央アジア（8頁） ヨーロッパ（12頁） 東南アジア（12頁）
山本正三ほか(2003)：『詳細新地理B』二宮書店	楯状地，冷帯気候（写真），針葉樹林（写真），大規模な小麦の農場（写真），日本への石炭輸出，水力発電，外国の都市を調べる－バンクーバーを例に－（6頁，横浜と姉妹都市，高緯度，フィヨルド，港湾都市，母語と公用語，東アジアとの結びつき，チャイナタウン），英語とフランス語，イギリス系住民とフランス系住民，冷帯，フランス人の植民，ニッケル，森林資源，セントローレンス海路，北アメリカ自由貿易協定（NAFTA），主要都市のアメリカ国境付近の立地，アメリカとの結びつき，貿易相手としてのアジア，アジア太平洋経済協力会議（APEC），酸性雨，エネルギー消費，アメリカとの国境線	浦安市（6頁） バンクーバー（6頁）	インドネシア（10頁） ブラジル（10頁） トルコ（9頁）	アングロアメリカ（16頁） オセアニア（12頁） ヨーロッパ（15頁）
中村和郎ほか(2004)：『楽しく学ぶ世界地理B』帝国書院	楯状地（写真），ツンドラ，アメリカ合衆国との国境，イギリス系住民とフランス系住民，多文化主義，ケベック州の分離・独立（写真），英語とフランス語の表記（写真）	渋谷区（6頁） パリ（3頁）	中国（14頁） オーストラリア（12頁） アメリカ合衆国（12頁）	東南アジア（12頁） アラブ諸国（11頁） ヨーロッパ（12頁）

カナダに関する事項については教科書の表現通りとし，記述されている順に示した．

各教科書により作成

れており，全体としてカナダに関する記述も相対的に多くなっている．

中学校の社会科地理分野では，日本を中心に学習し，国外については地域調査の事例として3つ程度の国家が取り上げられる．現在使用されている6冊の教科書を検討したところ，5冊でアメリカ合衆国が，4冊で中国が取り上げられていた（第2表）．そのほかには，オランダが2冊で取り上げられた以外は，イギリス，フランス，イタリア，マレーシア，韓国，ケニヤ，オーストラリアが各1冊で扱われていた．このようにしてみると，基本的にはアメリカ合衆国と中国のほかに，西ヨーロッパの1つの国を選ぶのが標準的である．このような状況では，カナダに関する記述は高等学校よりもさ

第2表　中学校社会科地理分野の教科書におけるカナダの記述

教科書	カナダに関する事項	取り上げられた世界の国々（分量）
江波戸　昭ほか（2003）：『わたしたちの中学社会　地理的分野』日本書籍	針葉樹の伐採（写真），針葉樹林（写真），高緯度地域，毛皮の防寒服（写真），国土が広い国，アメリカとの国境，イギリスの植民地，アメリカの最大の貿易相手国	多様な地域からなる中国（10頁），日本と同じ島国のイギリス（10頁），世界の大国アメリカ合衆国（10頁）
田邊　裕ほか（2003）：『新しい社会　地理』東京書籍	アメリカとの国境（写真），飼料輸入，タイガ，テレビの保有台数，原油を輸入する産油国，針葉樹林	多様な地域から構成されるアメリカ合衆国（10頁），多様な文化と変容するマレーシア（10頁），地域との結びつきを強めるフランス（10頁）
足利健亮ほか（2003）：『中学社会科　地理的分野』大阪書籍	面積の大きい国，アメリカとの貿易による強い結びつき，タイガ（写真），大規模農業（写真），イヌイットの氷の家（写真），イヌイットの毛皮のジャケット	世界一の人口をもつ国，中国（8頁），工業が盛んな多民族の国，アメリカ（8頁），観光都市が多く日本と同じくらいの面積の国，イタリア（8頁）
奥田義雄ほか（2003）：『中学社会　地理　地域に学ぶ』教育出版	日本の26倍の国土，ユニオンジャックの国旗からかえでの葉の国旗へ，イギリス系住民とフランス系住民，アメリカとの国境，資源生産国，食料品や原材料などの日本への輸出	中国（6頁），アメリカ合衆国（6頁），オランダ（7頁）
西脇保幸ほか（2003）：『新中学校　地理　日本の国土と世界』清水書院	森林の伐採（写真），アメリカとの国境，北海道との交流，	オーストラリアーさまざまな土地と人々のくらしー（12頁），中国ー変化する社会と人々のくらしー（8頁），オランダーEUの統合と人々のくらしー（4頁）
山本正三ほか（2003）：『中学生の社会科・地理　世界と日本の国土』日本文教出版	製材所（写真），アメリカとメキシコとの北米自由貿易協定，日本へのウラニュウムの供給，イヌイットの氷の家（写真）	となりの国の韓国（8頁），日本とつながりの強い国のアメリカ（10頁），遠いアフリカの国のケニヤ（8頁）

カナダに関する事項については教科書の表現通りとし，記述されている順に示した．

各教科書により作成

らに少なくなるといえよう．

それでは具体的に地理の教科書では，カナダのどのような側面について記述されているのだろうか．高等学校地理Bでは，まず，カナダ楯状地，ツンドラ，タイガ，冷帯気候，針葉樹林といった自然環境と，鉱産物や石油，木材といった天然資源や農産物の生産や輸出について多くの教科書が記述している．さらにフランス人とイギリス人の植民の歴史やイギリス系住民とフランス系住民の対立，ケベック州の分離運動，英語とフランス語という公用語，さらには多文化主義にふれる教科書も多い．また，北米自由貿易協定（NAFTA）によるアメリカ合衆国との結びつきを取り上げ，国家間の結びつきを説明する教科書も多い．また，アメリカ合衆国とカナダの人為的な国境，開かれた国境を取り上げる教科書もある．カナダについて記述が相対的に多く含まれる東京書籍と二宮書店の教科書では，さらに人口や都市，工業などがアメリカ合衆国との国境近く，特に五大湖・セントローレンス川流域への集中を説明している．また，酸性雨やエネルギー消費など，先進工業国が一般に抱える問題も指摘している．

中学校社会科地理的分野の教科書では，記述内容ははるかに少ないが，面積の大きさ，高緯度，針葉樹林，イヌイット，フランス系住民とイギリス系住民，資源生産国，アメリカ合衆国との結びつきなどが取り上げられている．

このように教科書では，領域と自然環境，歴史的背景，人口構成と社会・経済，地域格差，アメリカ合衆国との関係について記述されており，この具体的な内容をカナダの一般的性格として列挙すると，(1) 物理的大国，(2) 豊かな自然と天然資源・農産物，(3) 北方の国，(4) 少ない人口，(5) 複

雑な民族国家，(6) 経済的先進国，(7) 都市化社会，(8) 平和な国，(9) 短い歴史，(10) 大きな地域格差，(11) アメリカ合衆国との密接な関係―南北に働く力―，(12) カナダの独自性―東西に働く力―などとなろう．これらの点について，以下で検討することにしよう．

Ⅲ　カナダの一般的性格

Ⅲ－1　領域と自然環境

1）物理的大国

カナダは南北4,627km，東西5,187kmという広大な領域に広がり，その面積は9,970,610km^2（陸地9,215,430km^2，淡水面755,180km^2）である．日本の面積は377,748km^{2}であるから，日本の26.8倍ということになる．カナダは国土面積ではロシア連邦に次いで世界第2位であり，ヨーロッパの面積の990万km^{2}よりも広い．カナダに次ぐ面積をもつ国としては，中国の963.4万km^2（台湾と香港を含む）とアメリカ合衆国の962.9万km^2，ブラジルの851.4万km^2，オーストラリアの774.1万km^{2}がある．カナダで最も広いケベック州の面積は154.1万km^2，第2位のオンタリオ州の面積は106.9万km^{2}であり，それぞれ日本の4.1倍と2.8倍である．カナダには6つの時間帯があり，4.5時間の時差がある．カナダの首相を務めたマッケンジー・キングは，「世界には多くの歴史をもつ国があるように，カナダには有り余る地理がある」と述べている．

かつて帝国主義が華やかしきころ，国土の広さこそが国の力や富を表すものでとされたが，果たしてこのことが現在ではあてはまるのだろうか．ライシャワー（1979）が述べているように，国の大きさを測る尺度には様々なものがあり，国土もその1つであるが，人口や経済力，そして政治的な力なども重要なものである．日本は人口や経済力ではカナダよりもはるかに大国といえよう．自然条件の厳しい広大な国土をもつことが，カナダの1つの弱点となっていることも事実である．ちなみに，2001年のカナダの農地面積は455,285.0km^{2}であり，国土面積の4.5%にすぎず，ケベック州とオンタリオ州における農地の割合もそれぞれ1.3%と3.6%にすぎない．

2）豊かな自然と天然資源・農産物

広大な国土をもつカナダでは，手つかずの自然が残ってり，また天然資源に恵まれている．2002年のFAOの統計によると，カナダの穀物自給率は134%であり，日本の24%と好対照を示している．2003年のFAO統計によると世界の小麦の4.1%（第6位），大麦の10.2%（第4位），大豆の1.5%（第7位），トウモロコシの1.2%（第8位）を生産し，輸出では小麦が世界の第3位，大豆が第6位，大麦が第8位，トウモロコシが第13位である．各種の鉱産資源にも恵まれており，2003年の値によるとニッケル鉱が世界の第3位，亜鉛鉱が第4位，モリブデンとコバルト，銀鉱が第5位，ダイヤモンドと鉛鉱が第6位，金鉱が第7位，鉄鉱と銅鉱が第8位である．エネルギー資源ではウランの生産量が世界の約3分の1を占め第1位，天然ガスが7.1%で第3位，発電量が3.7%で世界の第5位である．国土の49.5%にあたる494万km^{2}が森林で覆われており，木材の輸出量は世界の17.8%を占め第2位である．

Harold Innisの「ステープル理論」に示されているように，カナダは第1次産品を輸出することで，

経済発展をとげてきた（Watkins，1963）．初期のころは漁獲物と木材，そして鉱産物，さらには小麦が輸出の中心となってきた．輸出から得られた収益をまずは第１次産品を再生産するために投資し（Backward Linkage），ついでそれらを加工する産業に投資し（Forward Linkage），さらには住民の消費財生産のために投資する（Final Demand Linkage）ことによって，経済を多様化し，成熟させるのに成功した．

３）北方の国

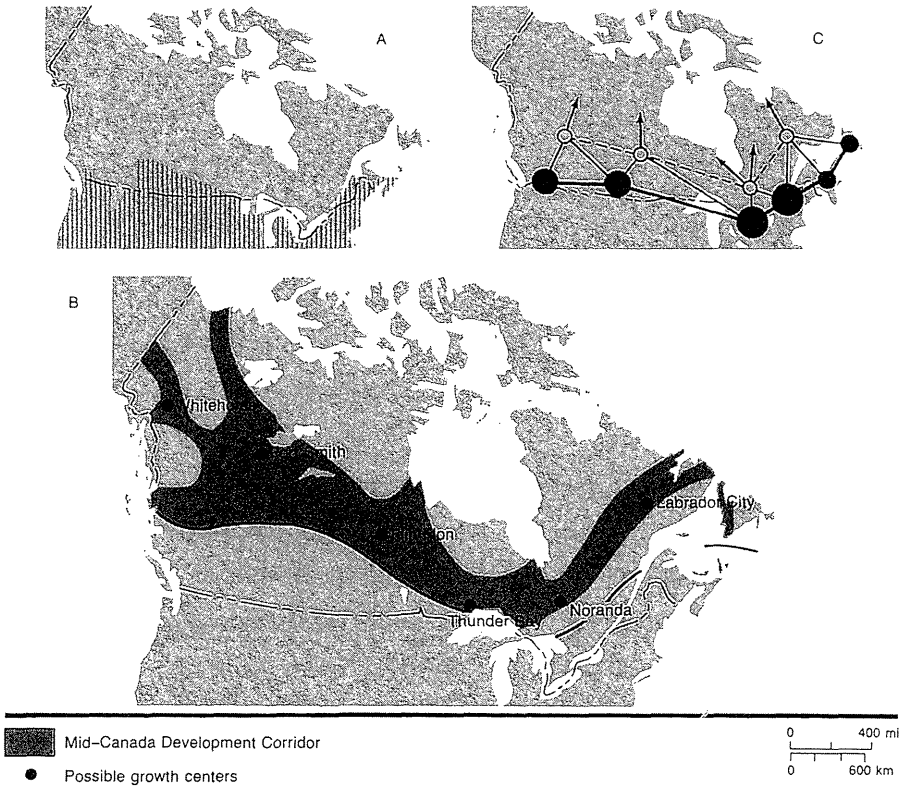
カナダに対する一般的なイメージの中で，最も重要なものの１つは北方の国ということであり，寒い国ということである．確かにカナダの南端はエリー湖のミドル島で北緯41度41分，北端はエルズミア島のコロンビア岬で北緯83度７分である．南端の緯度が日本では青森県の下北半島の先端に相当し，カナダ最大の都市のトロントは北緯44度で札幌と同じ緯度，首都のオタワの緯度は45度30分で稚内の緯度と同じくらいである．トロントの７月の平均気温は20.5度であるが，１月の気温は－6.8度となる．内陸のウイニペグの７月の平均気温は19.8度であるが，1月の平均気温は－18.4度である．

しかし，カナダが北方の国とされるのは，このような物理的な理由だけではない．それはカナダの国の成り立ちに起因している．リオ・グランデ川の以北のアメリカ大陸にはカナダとアメリカ合衆国という２つの国民国家が存在し，両国の関係は極めて良好である．しかし，歴史的にも民族的にも共通点の多い２つの国家が存在するということは，長年にわたる相互の，正確にはカナダのアメリカ合衆国に対する反発を象徴している．「カナダは世界で最も古く，永きにわたる反米主義者」とも言われるゆえんである．

Paterson（1989）によると，国家が存在するためには，独立した単位として分離していることを理由づける積極的要因があるか，隣国との連合をおじけずいてやめさせるような消極的要因があるためか，どちらかであるである．カナダの場合は後者であり，多くのカナダ人はアメリカ人にはなりたくないと思っている．フランス系カナダ人は南のイギリス系を中心とした大きな文化集団に飲み込まれたくないと考えたし，イギリス系カナダ人はアメリカ合衆国の独立戦争に反対して，アメリカの13の植民地から避難してきた王党派の人々の考えを基本としているからである．

しかし，消極的要因のみで国家を存続させることは困難であり，カナダも国家として成熟するには，何らかの国家存続の積極的理由を見いだす必要にせまられてきた．そこで，第２次世界大戦後，「広大な未開発の北部を統制する」というカナダの役割が定められた．それは，西部開拓がアメリカ合衆国の雑多な人々を１つの国民にし，合衆国の社会を形づくったように，北部開発がカナダの国家の将来に大きな影響を与えると考えられたからである．このことが，北方の国カナダの意味である．カナダは第１図のAのように，アメリカ合衆国の余り物という概念を脱却し，Bのように北方を制する国家を意図し，実際にはいくつかの開発軸から北部へ向かおうとした．

しかし，これらの国家の目標あるいは願望を実現させるのは極めて困難であり，その理由は，第２図に示したメンタルマップに明確に示される．これは「もし自由に選ぶことができたならば，どこを居住地として選択しますか」という設問に対しての評価を示したものである．最も評価が高いのは南オンタリオと南ケベック，そしてブリティッシュコロンビア州のビクトリア島である．これに次ぐの



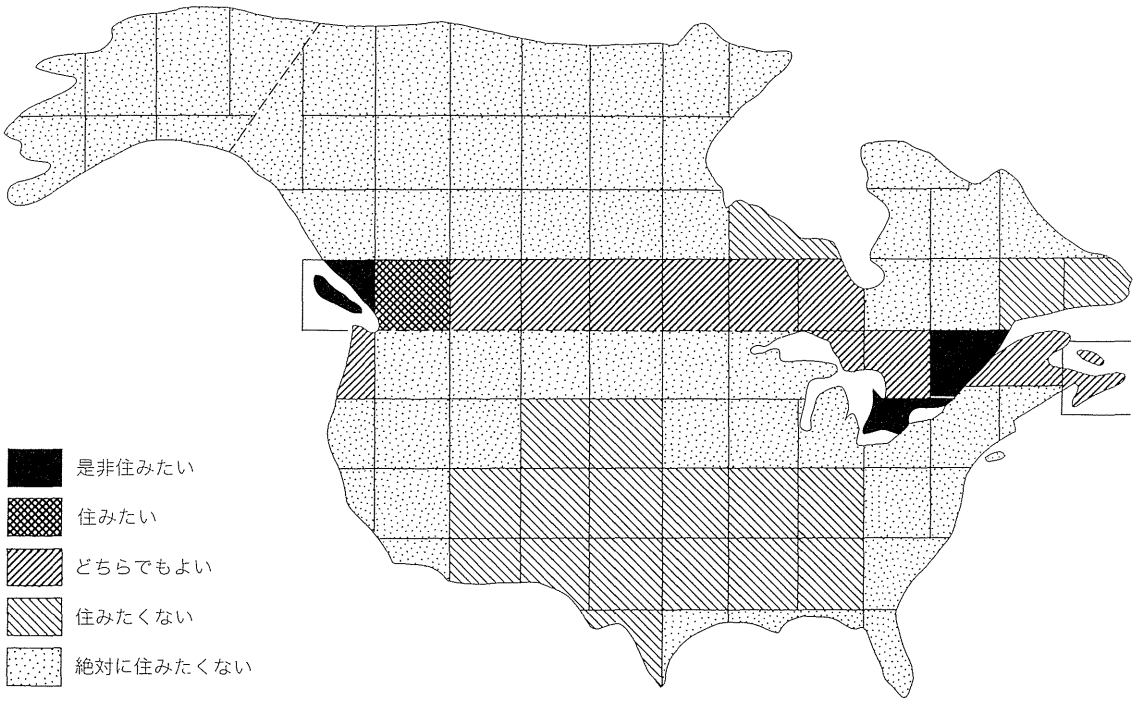
第1図　カナダの3つの見方
A：カナダはアメリカ合衆国の延長
B：カナダは北を制するという使命を持った国
C：カナダの開発は中央開発軸にそって行うべきである
Paterson, J.H. (1989): *North America: A Geography of the United States and Canada. Eighth Edition*, Oxford University Press, New York より引用

が，ブリティッシュコロンビア州の南東部からアメリカ合衆国の国境沿いに大平原，北オンタリオ，そしてニューブランズウィック州からノバスコシア州に至る地域である．それ以外のカナダ北部とアメリカ合衆国にはカナダ人は住みたくないと思っている．このように「カナダ人は心の中では冒険にあこがれ，北方の人々でいたいと思っているが，現実にはできるだけ南に住みたいと思っている」のである（Paterson，1989）．

Ⅲ－2　歴史的背景

1）先住民族とバイキングの探検

地質学的証拠によると，18000～20000年前くらいまでは，現在のカナダの地域は完全に氷河でおおわれていた．この氷河が時には拡大し，また時には後退しながら徐々に融けてゆき，現在から6000～7000年前に，バフィンー＝エルズミア地域と西部の高山氷河を除いて消え去ってしまった．カナダに最初にやってきたのは最終氷期に陸化したベーリンジアをわたってアジアからやってきた先住民族で，その時代は2万年前とも3万年前ともいわれている．大陸氷河の後退によって生じた隙間



第2図　カナダ人の居住地選好
Paterson, J.H. (1989): *North America: A Geography of the United States and Canada. Eighth Edition*, Oxford University Press, New York を修正

を通って南下した先住民族が，それほど永くない年月のうちに南アメリカの南端までたどりついたといわれる．

最初にカナダにやってきたヨーロッパ人は，紀元1000年頃のバイキングであった．北欧の伝承文学の「サガ」によると，赤毛のエリックの子のリーフ・エリクソンの一行は，現在のバフィン島やニューファウンドランド島，ラブラドル，ノバスコシアなどに到着した（山本，1976）．野生の野ブドウが実る地域で植民地を建設したが，仲間同士の争いと先住民族との戦いで，数年で滅んでしまった．バイキングはハドソン湾に入り，北アメリカの内陸部まで到達したともいわれている．バイキングの遺跡は，ノルウエー人のヘルゲ・イングスタドによって1961年にニューファウンドランド島のベルアイル海峡に沿う北端のランス・オン・メドーで発見された（プェルトナー，1981）．

ヨーロッパ人が新大陸に最初に到達した頃には，カナダの先住民族は全体でも20万人あまりにすぎなかった．彼らはそれぞれ地域の自然環境に基づいた生活をしており，居住地域ごとに固有な生活様式がみられた．先住民族を大きくわけると，北極圏で移動生活をするイヌイットやエスキモー（約2,200人），北方林地帯（タイガ）で移動生活をするアルゴンキン族などの人々（71,000人），セントローレンス川・五大湖周辺で定住生活をするヒューロン族やイロクォイ族などの人々（16,000人），バッファローを追って大平原で移動生活をするスー族やブラックフット族，ペレイン・クリー族，プレイン・オジブア族などの人々（23,000人），南部コルジレラで移動生活をする人々（27,000人），そして太平洋岸で漁労などを行い定住生活をするハイダ族やヌートカ族などの人々（46,000人）であった．

2）フランス人の開発

1497年にイギリス王の命を受けたJohn Cabotがニューファウンドランドを発見し，新しい漁場の情報がもたらされると，まもなくイギリスとスペイン，ポルトガルから，さらにフランスのブルタニューやノルマンディーから多くの漁民が夏に鱈漁にやってきた．はじめ鱈は濃く塩漬けにされ，船倉に入れられて，生のままでヨーロッパに持ち帰られた．ポルトガルやスペインなどのヨーロッパ南部の漁民は塩を豊富に持っていが，フランスやイギリスなどのヨーロッパ北部の漁民は塩の欠乏状態にあり，彼らは海岸で魚を乾燥する技術を導入した．これによって魚の干し架と小屋，倉庫が必要となり，土地が占拠されるようになった．イギリス人はニューファウンドランド島アボロン半島に，フランス人はケープブレトン島やノバスコシアの海岸に漁業基地をつくった（島崎，1994）．

1534年にフランスのJacque Cartierは，セントローレンス川の河口に臨むガスペ半島に上陸し，フランスの旗と大きな十字架を立てて帰国し，その翌年には再びフランスを出航してセントローレンス川をさかのぼり現在のケベックに到達した．さらにモントリオールまで行きそこで越冬したが，厳しい寒さと食料の欠乏によって，74名のうち25名が死亡するという悲惨な状況に陥った．その後，フランスは実質的にカナダを放棄してしまった．フランス人の開拓が始まるのは，1604年のSamuel de Champlainによる探検とその後の植民による．Champlainは1605年にファンディ湾ぞいのポート・ロイヤルに植民地を建設するが，1608年には植民地経営の中心をケベックに置いた（東，1969）．1642年にはモントリオールに植民集落を建設するが，全体として開発は低調で，1670年に至っても人口はわずかに4,350になったにすぎなかった．

本格的な開発は，ルイ十四世の積極的植民地経営が始まった1665年以降であった．ルイ十四世は功績のあった家臣や軍人にセントローレンス川ぞいの土地を下付し，下付された土地にはブルタニューやノルマンジーなどで募集された農民が開拓民として送られた．彼らへの小作地の分配の際には，セントローレンス川ぞいに幅が150m，内陸方向へ奥行きが1000mといった，細長い長地割が用いられた．これは，当時の唯一の交通ルートであったセントローレンス川に皆が面すること，川沿いの低地とその背後の丘陵，そして山地を含めるようにして土地条件を均等にすること，比較的広い配分農地を得るとともに農民は相互に接近して居住することができたこと，測量のコストがかからないことによる（Harris，1966）．セントローレンス川沿いではこの地割が基本となっており，今日の景観を特徴づけている（写真１）．植民者は農業や漁業，そして林業にもたずさわった．

Robert la Salleは1683年にはミッシシッピ川を下ってその河口におよび，その流域全体をフランス領として宣言した．しかし，フランス人の主な関心は毛皮の交易にあったため，真の植民地に発展せず，カナダでもフランスからの移民が多く住みついたところはケベックやモントリオールを中心としたセントローレンス川沿いの狭い地域であった．

3）イギリス人の開発

イギリス人による毛皮交易は1610年のHenry Hudsonのハドソン湾沿岸の探検を契機に，その後ハドソン湾会社が1670年に設立され本格的に始まった．セントローレンス水系を通じて勢力を拡大したフランス人と，ハドソン湾から内陸に入っていったイギリス人が衝突し始めたのは17世紀の終

写真１　セントローレンス川ぞいの長地割

わりであるが，1701～13年の戦争の結果，ユトレヒト条約によりニューファウンドランドとノバスコシア，ハドソン湾地域が正式にイギリス領となった．1756年にヨーロッパでおこった七年戦争の一部としての性格をもつようになった新大陸での植民地抗争の結果，1763年のパリ条約に基づいて，フランスのアメリカ大陸における植民地はすべてイギリス領になった．当時のカナダ植民地には79,000人のフランス系住民がいたが，これらの人々が反英感情をいだいてアメリカの13の植民地と結んで独立の動きをしないように，1774年にケベック法が制定された．これによってフランス系住民は，フランス語の使用やカトリック信仰の容認など，それ以前の生活形態が保証されるようになった．しかし，このケベック法は，それまでフランスの植民地であったアパラチア山脈の西のミシシッピ川流域にも適用されたことから，当然自分たちの勢力範囲であると考えていた13の植民地の独立派の住民を刺激し，これがアメリカ合衆国の独立運動を加速した．

1775年にアメリカ合衆国の独立戦争がおこると，イギリスに忠誠をつくす王党派の人々が現地で迫害され，多くの人々がイギリス本国に帰るか，セントローレンス川以北のイギリス植民地に移り住むことになった．これによってニューブランズウィック植民地が新たにできたほか，カナダ植民地はセントローレンス川沿岸のフランス系住民と五大湖周辺のイギリス系住民の地域に分けられるようになった．そして，1791年のカナダ条例によって，セントローレンス川沿岸は下カナダ（Lower Canada，後のケベック州），五大湖周辺は上カナダ（Upper Canada，後のオンタリオ州）に分けられるようになった．上カナダは，オンタリオ湖とエリー湖，ヒューロン湖に囲まれ気候は温暖で，土壌条件にも恵まれていたため，農業開発の適地であった．ここでは湖岸線に基準線を設け，それに並行と直角に１マイルずつ分割するという方式で，方形の地割がつくられた（写真２）．さらにそれが１区画40haを標準として配分され，農民はそれぞれの区画の中央付近に住居を構えたために，散村ができあがった（田林，2004）．

写真 2　南オンタリオの方形地割

4）カナダ国の成立と発展

1861年に南北戦争が始まるがイギリスは南部に対して好意的な態度をとったために，北軍の反英感情が高まり，カナダを武力で併合しようとする動きがでてきた．南北戦争終結後も戦時に拡大した膨大な軍事力をカナダ併合に向けられるという脅威が続いた．また，南北戦争後急速に進むアメリカ合衆国の西部開発の影響が，当時ハドソン湾会社の支配下にあった西部の大平原までおよび，アメリカ領に組み入れられるのではないかという恐れがでてきた．そこで北アメリカのイギリスの植民地を統合して，自治領をつくるという案が現実化してきた（木村，1994）．イギリス政府は上・下カナダの統一を企画し，1867年にオンタリオ州とケベック州，ニューブランズウィック州，ノバスコシア州からなるカナダ連邦が発足した．その後，1871年にブリティッシュコロンビア州が連邦に加入した頃から，東西を結ぶ大陸横断鉄道計画が具体化され，1885年にはカナダ太平洋鉄道，ついでカナダナショナル鉄道も完成した．積極的な移民政策ともあいまって，西部の開発は急速に進んだ．特に，1900～13年の小麦ブームに際しては，大平原へ流入する移民が激増した．1871年にはカナダ全体の人口が380万であったものが，1920年には900万に達した．アルバータ州やマニトバ州，サスカチュワン州，プリンスエドワード島州なども連邦に加入し，10州3準州からなる現在のカナダに発展した．

すでに述べたように，カナダの発展を支えたのはステープル（主要な第1次産品）であった．1670年以前のステープルは鱈と毛皮であり，1670～1820年は毛皮，1821～67年は木材であった．カナダ連邦結成から1920年頃までのステープルは，小麦と木材とパルプ，そしてニッケルを中心とした鉱産物であり，完成した鉄道システムがステープル経済を支えた．そして，1920年以降は工業化が進み産業が多様化し，もはやステープルのみに依存する経済から脱却することになった．資本投下量の増大，農業フロンティアの拡大，鉱業や水力発電の発達，道路による輸送システムが整備された．トロントやモントリオール，バンクーバーなどの都市が発達し，主要な交易相手もイギリスおよびヨーロッパからアメリカ合衆国へ移った．

1867年は日本の明治維新の前年であり，その意味ではカナダは国家としては短い歴史しかもたない．しかも，1867年にカナダは完全に独立国家になったわけではない．カナダ連邦を成立させた英領北アメリカ法は，英国議会の制定法であり，これがカナダの憲法であった．したがって，憲法改正権や司法審査権もなく，外交権もイギリスにあった．カナダが外交権を獲得したのは1931年のニューウエストミンスター法によってであり，さらに1949年に違憲審査権を獲得した．英領北アメリカ法に代わって最終的にカナダ憲法が発効したのは，1982年のことである．このようにカナダは４つの段階を踏んで独立したといわれ（岩崎，1994），この意味でも歴史の浅い国であるといえよう．ちなみに現在のカエデの国旗が使われるようになったのは1965年であり，1880年に作曲されたオー・カナダが正式な国歌になったのは，1980年６月のことである．

Ⅲ－３　人口構成と社会・経済

１）少ない人口

2005年のカナダ統計局のデータによると，カナダの人口は32,270.5万であり，日本の人口の12,761.9万の４分の１である．アメリカ合衆国の人口は29,363.3万であるので，その９分の１である．人口密度についても日本が338人/km^2，アメリカ合衆国が31人/km^{2}であるのに対して，カナダでは３人/km^{2}である．カナダで最も人口密度の高いオンタリオ州南部の人口密度も60人/km^{2}程度であり，日本の北海道の72人/km^{2}を下回っている．しかし，問題はこれらの人口の大部分がアメリカ合衆国の国境から100km以内にへばりつくように分布していることである．カナダでは最も南の限られた土地（特に都市に）に人口が集中していることから，土地問題や交通渋滞，さまざまな公害問題などが深刻である．

２）複雑な民族国家

先住民族の居住地をフランス人が植民地化し，さらにイギリスの植民地になり，その後多くの移民を西ヨーロッパや東ヨーロッパ，アメリカ合衆国から受け入れ，近年ではアジアからの移民が増加しているといった経緯を反映し，カナダは多くの民族から成り立っている．特徴的なのは，イギリス系とフランス系という２つの民族が卓越し，両者が対立しているということである．1996年のセンサスによるとイギリス系が38.0％，フランス系が24.0％であり，第３位がドイツ系の3.4％となっていた．また，英語を母語とするカナダ人は59.2％であるのに対して，フランス語を母語とする人々は22.3％にすぎない．これはフランス系以外の移民は，世代交代が進むにつれて英語を母語とするようになるからである．

それでは，カナダ全体として少数派のフランス系カナダ人が，どうしてその文化的・社会的地位を長年にわたって維持しているのであろうか．それは，カナダ全体では少数派のフランス系カナダ人であるが，その大部分がケベック州に集中しており，ケベック州ではフランス系カナダ人が多数を構成しているからである（岩崎，1994）．カナダに２つの主要民族が並存しているということが，絶えずカナダの連邦制崩壊の危機を引き起こしてきた反面，カナダという国を生みだし，今日まで存続させてきた大きな要因の１つになっている．

1970年代の移民法の改正のあと，特に1980年代以降カナダへの移民の半数近くがアジア系の人々であり，ケベック州のフランス系住民の分離を抑えるだけではなく，アジア系やそのほかの非ヨーロッパ系の民族集団を含む多文化主義の実現を目指すことになった．多文化主義とは綾部（2003）によると，「多民族から構成されている国民国家が，単一の有力な民族の言語・文化の下に統合されていく同化主義的政策をとらず，国民国家を構成する多様な各民族集団の伝統文化，言語，生活習慣を積極的に保護し，政治的，社会的，経済的，文化的不平等をなくして，国民社会の統合を維持しようとするイデオロギーであり，政策原理である」とされる．

3）都市化社会

カナダは豊かな自然と広大な国土をもつ国であり，人々はゆったりと生活しているというイメージであるが，一面では極めて高密度社会という側面もある．このことは，カナダの人口の大部分が都市に居住しているということに示されている．2001年の国勢調査によると，人口の80％が都市居住者であった．カナダでは少なくとも人口が1000以上で，人口密度が400人/km^2以上のところに住んでいる人を都市人口としている．日本では人口集中地区に住んでいる人口を都市人口とし，その割合は2003年には65.4％であった．

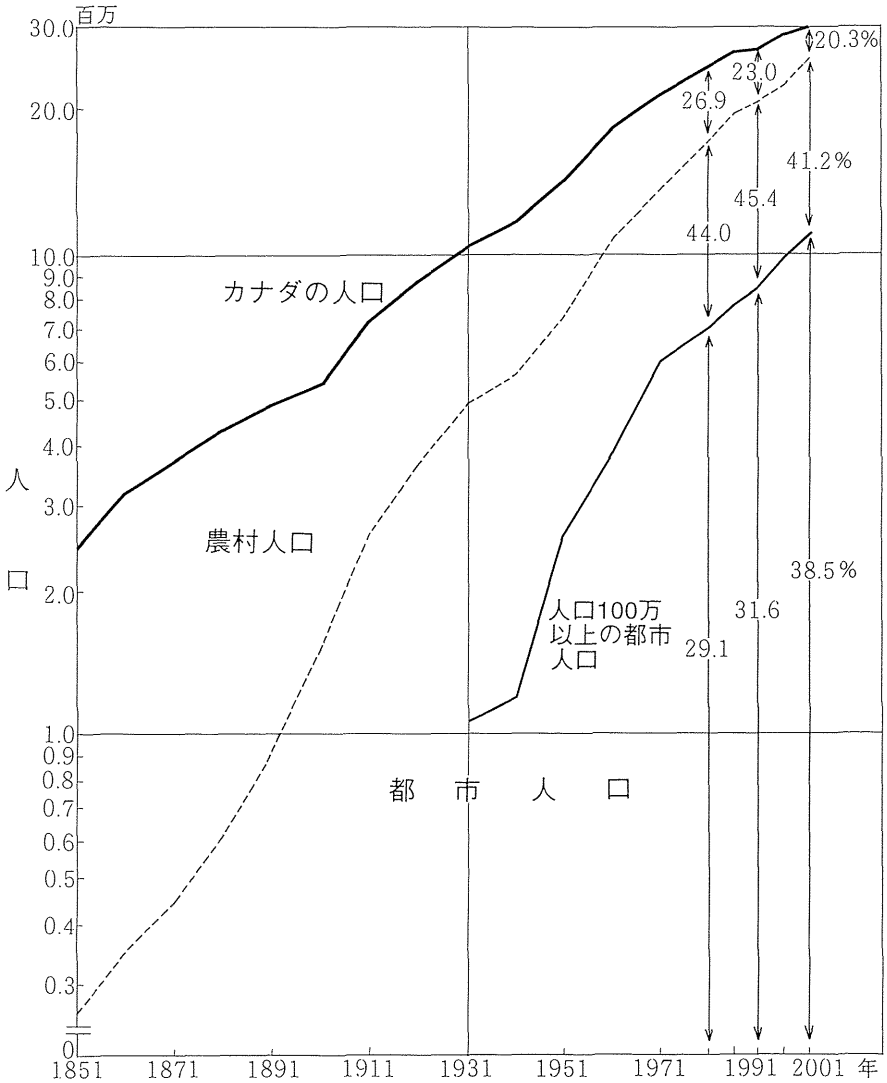
カナダでは第3図に示したように19世紀まで大部分の人々は農村に居住していた．1901年の国勢調査によると総人口541.8万のうち63％農村人口であった．20世紀になって，特に第2次世界大戦後都市人口の割合が増加し，1941年の54％から1961年には70％，1991年には77％に達した．

カナダには現在100万以上の人口を擁する大都市（Census Metropolitan Areas）の人口割合が増加している．その1つの要因は，2002年にカルガリーが，2004年にエドモントンが人口100万を超えたこともあるが，トロントやバンクーバーなども急成長していることも関係している．2005年には530.4万のトロント，365.6万のモントリオール，220.8万のバンクーバ，そして114.9万のオタワ・ガトニュー，106.0万のカルガリー，101.6万のエドモントをあわせた人口が1,437.3万となり，これだけでカナダ全体の44.5％となる．カナダにはこのほかに10万以上の人口をもつ都市（Census Metropolitan Areas）が21あるが，この人口の合計が665.7万で，さらに20.6％がここに住んでいることになる．

4）経済的先進国

カナダは経済的に先進国であり，2003年における国民総所得は773,943百万ドルで世界第8位であり，世界の先進国サミットにも第2回目から参加している．1人当たり国民総所得は24,470ドルで世界の第17位である．数値だけでは日本の3分の2程度であるが，カナダでの居住感覚からすれば，日本よりもはるかに豊かな国のようである．それは住宅や食料品の値段の安さ，労働時間の短さなどから直接的に感じることができる．

カナダはまた国連通常予算の2.8％を負担しているが，これは世界第7位である．また，政府開発援助（ODA）の実績も世界第9位であり，加盟国全体の3.2％を占めている．これは国民総所得の0.26％にあたり，日本の0.16％やアメリカ合衆国の0.19％よりも高く，国際的に重要な地位を占めている．国際貿易をみると，一般的には先進国は原材料を輸入し，工業製品を輸出しているが，カナダ



第3図　カナダにおける都市人口の拡大
Ley, D.F. and Bourne, L.S. eds. (1993): *The Changing Social Geography of Canadian Cities*. McGill-Queen's University Pressを修正・加筆

は工業製品も原材料も輸出し，主として工業製品を輸入しているという特徴がある．

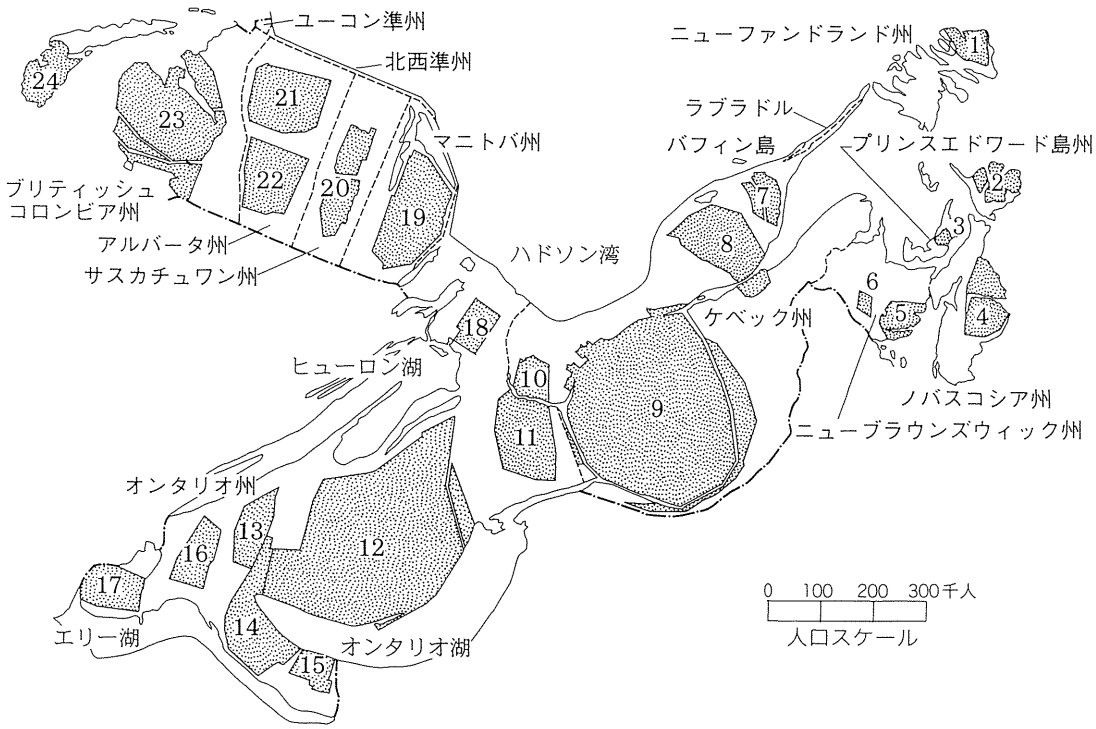
5）平和な国

カナダは一般的に平和で安全な国であるというイメージが定着している．その1つはアメリカ合衆国のように戦争で独立を勝ち取ったのではなく，平和隣に話し合いで徐々にイギリスから独立していったという歴史的経緯が関係しているようである．現実に犯罪発生率や交通事故件数をみても，アメリカ合衆国の3分の2程度である．また，アメリカ合衆国のように大都市の中心部では夜間には人通りが途絶えるということがなく，特殊な場所以外は危険を感じさせるところは少ない．海外援助や国連軍としての国際平和維持活動でもカナダは活躍している．

Ⅲ－4　地域格差

カナダ各地には開拓に適した場所もあったが，それらは地理上の障壁や居住不可能な地域によって互いに隔てられており，カナダはともすれば離ればなれの地域社会やセクションとして発展していく傾向があった．また，広大な国であるだけに場所により自然環境や経済的条件，歴史的背景が異なっており，利害関係も違っている．このことからカナダでは，都市と農村，中央と周辺，東部と西部，南部と北部といった地域格差が明瞭である．

最も典型的な例は，南オンタリオと南ケベックの核心地域とそのほかの後背地域という図式である．核心地域は面積ではカナダ全体の３％ほどにすぎないが，人口の60％が集中し，経済的・政治的・社会的・文化的中心地となっている．第４図は人口の大きさでカナダを表した地図であるが，南オンタリオと南ケベックの重要性が理解できる．このカナダの核心地域には企業の本社が立地し，資本や技術や情報がここから後背地域に流れ，後背地域に大きな影響を与える．核心地域に従属する後



1	セントジョーンズ	9	モントリオール	17	ウィンザー
2	シドニー・グレースベイ	10	ハル	18	サドバリー
3	シャーロットタウン	11	オタワ	19	ウィニペグ
4	ハリファクス	12	トロント	20	リジャイナ
5	セントジョン	13	キッチナー・ワータルー	21	エドモントン
6	フレデリクトン	14	ハミルトン	22	カルガリー
7	シクーティミ・ジョンキエール	15	セントキャサリン	23	バンクーバー
8	ケベック	16	ロンドン	24	ビクトリア

第４図　カナダのアイソ・デモグラフィック・マップ（1966年）
Skoda, L. and Robertson, J.C. (1972): *Isodemographic Map of Canada*. Geographic Paper No.5より引用

背地域では，一次産品が生産され，これが核心地域に供給される．

Ⅲ－5　南北と東西の方向に働く力

1）アメリカ合衆国との密接な関係―南北方向に働く力―

カナダとアメリカ合衆国は6,000kmにもわたる国境を共有し，極めて密接な関係にある．カナダの輸出額の80％以上，輸入額の70％近くがアメリカ合衆国を相手とするものである．主要産業におけるアメリカ資本の割合は，製造業で62％，鉱業で66％にも達している．また，北米自由貿易協定（NAFTA）が1994年に発効し，いずれは関税が撤廃されることになり，経済的にはますますアメリカ合衆国の影響が強まる傾向にある．さらに深刻なのは，アメリカ合衆国の文化的影響であり，言語や習慣，生活形態，文化的背景が極めて類似していることから，アメリカ合衆国の強力な吸収力にややもすれば飲み込まれそうになる．例えば，テレビの電波が直接カナダに入り込み，笑い話のようであるが，ブッシュをカナダの大統領（カナダには大統領がいなく，国王がエリザベス女王で，首相がいる）と思いこんでいる子供がたくさんいるとのことである．南のアメリカ合衆国の吸引力は，南北に働く力として表すことができよう．

2）カナダの独自性―東西方向に働く力―

カナダが独立を保とうとする力は，東西に働く力と表現することができる．これは1つは歴史的な意味をもっている．東西の力は，人間によるものであり，それは地理的というよりも歴史的であった．例えばアメリカ合衆国からの南への吸引力に対するフランス系カナダ人の数世紀にもわたる抵抗であり，後のイギリス系移住者の，イギリスと結びつきを保ちながらアメリカ合衆国から独立した存在でありたいという伝統的な願望である（ケアレス，1978）．

しかし，カナダを東から西へ1つの国として結びつけるのに役だった最も強い力は，元来は地理的なものである．それは，川や湖を含めたセントローレンス水系と，この水系にそって延びていった東西交易の影響である．交易と定住がセントローレンス湾から川上に，そして五大湖周辺の居住地へ，東から西に進むにしたがい，カナダという国家自体がセントローレンスの交通路に沿って発展した．セントローレンス川はカナダの発展の軸であり，ややもすればバラバラになりそうなカナダを結びつける大きな役割を果たしてきた．

Ⅳ　カナダの地域性

Ⅳ－1　1つの国，多くの地域（J. L. Robinson, 1989による）

Robinsonの*Concept and Themes in the Regional Geography of Canada*では，カナダを大西洋・湾岸地域，五大湖・セントローレンス低地，カナダ楯状地，内陸平原，ブリティッシュコロンビアのコルジレラ地域，北部の6つの地域に区分し，自然環境や景観，歴史的背景，経済活動，都市構造などから，それぞれの地域の特徴が記述されている．最初に断ってあるように，Robinsonはこれらの地域やより細かい地域を統合したり，カナダ全体を性格づけようと意図しているわけではない．明確に，政治的にはカナダは1つであるが，地理的には1つのカナダは存在せず，地域的な多様性をもった国

であると述べている．そして，地誌の１つの目的として，環境や人々，資源などのパターンの場所や地域による違いを記述したり分析したりすることをあげている．

これを踏まえて，終章では，以下のように述べている．カナダは，カナダ以外の国々やカナダ人以外の人々にとってのみ，均一な政治的地域であり，カナダでは国内の広い領域にまたがる大部分の現象に，均一さはみられない．カナダのそれぞれの地域の人々は，カナダの全体的な性格をそれぞれ違ったように認識している．カナダは１つの国であるが，実態は複数の地域の集まりである．カナダ地誌－すなわち，その場所による類似性と相違性，その問題点と目標，その人々と環境－を読んだり，それについて考えたりすることが，この広大な国のよりよい理解に役立つだろう．

Ⅳ－２　複数の地域からなる国（R. M. Bone, 2005による）

Boneの*The Regional Geography of Canada*は，カナダを大西洋カナダとケベック，オンタリオ，西カナダ，ブリティッシュコロンビア，北部に分け，自然環境と歴史的背景，カナダにおける地位，人口と経済活動，都市，内部の地域差，将来展望などの側面から，それぞれの地域の特徴を記述している．そして，最後にカナダの多様性を強調している．

カナダの巨大な大きさは，様々な地形や気候，そして変化に富む植生などの多様な自然環境を含んでいることを意味している．このような地理的多様性が，それぞれの地域の歴史と結びついて，この国を複数の地域からなる１つの国に変化させてきた．地理と歴史がカナダの複数の地域をまとめ１つの連邦国家とし，その過程でカナダへの帰属意識と地域意識が形成された．

カナダの歴史的過程において，特定のグループの間に緊張が生じてきた．この緊張は，この本では，断層線と呼ばれているが，それは中央主義者と非中央主義者，フランス系住民とイギリス系住民，先住民と非先住民，新移民とカナダ生まれの住民として表現される４つの亀裂である．しかしながら，この亀裂はカナダを分裂させるというよりも，カナダ人に対して異なった地域や政府，そして様々な人々を結びつける架け橋をつくることを強要した．カナダは，文化的多様性や地域による違いを，その社会・政治構造の中に統合することによって，均一な国民国家に代わる国，すなわち大多数が異なった形で居住する国を提示している．カナダは他方では，例えば同性結婚や先住民族の自治政府によって示されるように，少数派の立場も受け入れている．そのようにすることによって，カナダは矛盾とともに生きようとしている．そして，この矛盾がカナダを魅力的で，他とは異なった場所にしている．

Ⅳ－３　カナダの地域主義とカナダの統合（Warkentin, 2000による）

Warkintinは*A Regional Geography of Canada: Life, Land, and Space*において，カナダを大きくカナダ大西洋岸と東部内陸，中央内陸，西部内陸，カナダ太平洋岸，北部に分け，さらにこれらを39に細分している．そして，最後の章でこれらの６つの地域の性格についてまとめた後，それぞれの地域への感情と帰属意識について検討したうえで，カナダ全体を結びつける要因について列挙している．

1）地域感情と地域への帰属意識

カナダにおける地域感情や地域への愛着はどの程度強いのだろうか．これについては実証は困難であるが，いくつかの定性的な例を示すことができる．ケベックはフランス系住民の故郷あるいは文化の中心という役割を果たしている．カナダ大西洋岸の人々は自分たちの地域に対する強い帰属意識があり，たとえその地域を離れていても，入り組んだ海岸と海が結びついたその土地へ帰りたいと常に望んでいる．大平原でもまた地域に対する思い入れは強く，そこで生まれ育った人々は，その土地を離れたがらない．しかし，大平原は一旦そこを離れた人々を呼び戻すほどの力はもっていないようである．他方，オンタリオでは都市が卓越し，それが同質な都市的生活様式への愛着を生み出している．ブリティシュコロンビアでは自然環境が生活様式に大きな影響を及ぼしている．住民はこの地域の山や森に強い愛着をもっているばかりではなく，この地域は温暖な気候もあって，他の州から退職者のみならず多くの人々を引きつけている．北部，特に楯状地は多くの居住者とレクリエーションのための来訪者から好まれている．個人のレベルでの地域間の関連性とはどのようなものであろうか．強い地域間の断裂があるのだろうか，それとも相互の信頼関係や結びつきがあるのだろうか．トロントやオンタリオに対する憎しみが，カナダを１つに結びつける強い要因であるとユーモラスに語られることもある．地域的嫉妬が強く表にだされることも事実である．例えば，西部の人々はケベックの人々の文化的独自性とカナダ連邦に対する要求に反感をもっている．彼らはまたオンタリオの力と富と貪欲さに敵意をもっている．しかしながら，このような本能的な感情は，厳しい対立や征服と被征服の長い歴史をもった世界のいくつかの地域に存在するようなレベルのものではない．

カナダには地域の経済を優遇する州の政策がある．これらの政策は，これに直接かかわる人々を怒らせるような事件の結果できたものである．そのようなささやかな出来事はまれであるが，これがまれであるということが，州と州の間の共同の精神があることを示している．これが，個人的なレベルになるともっと明瞭になる．カナダ人が自分たちの国を旅行する時，かれらが訪ねるすべての地域で暖かく歓迎される．

1990年代に入って，集団の意識や領域的帰属意識，地域的な感情や忠誠心そして執着などを述べる際に，民族的ナショナリズムと市民的ナショナリズムが次第に議論されるようになってきた．民族的ナショナリズムは文化や言語，共通のコミュニティ的経験に基づく帰属意識や忠誠心と関係しており，ケッベク人が特定の領域に長年にわたって１つのコミュニティをつくって生活することによって維持してきた，人間集団の執着心や感情である．市民的ナショナリズムとは，決められた行政地域において，共通の規則や法の下で，あるいは民主主義により公正な選挙に参加し，行政上の責任を分かちあうことにより，生活してきた人々がいだく帰属意識に関係している．ナショナリズムという言葉は，民族的であろうと市民的であろうと，自治や自主独立への願望を意味している．そのようなナショナリスティックな感情が，カナダの多くの地域の特徴である，小さかろうと大きかろうと様々なスケールの地域で存在する，地域主義や地域への帰属意識を，凌駕している．ケベックの人口が移民よって多様化するにつれて，民族的ナショナリズムは人口学的に変質しているが，ケベックは，当然ながら，民族的ナショナリズムと市民的ナショナリズムの両者によって特徴づけられる．

2）統合の要因

個人個人は基本的には好意的であるが，その広さや文化的違い，多様な経済構造，そして経済格差のために，カナダを治めるのは非常に困難である．地域感情が非常に強いことが，他の地域を批判し，国を分裂させようとする原因に必ずしもなるわけではない．むしろ，このことはカナダの巨大な規模と多くの地理的な違いから生じている．カナダ全体に対する認識は，見る側面ごとに違ったものになる．これらのそれぞれ異なった地域的な経験や展望の結果として，国家としての統一を語ることは非常に困難である．それにもかかわらず，いくつかの統一要因を提示することができる．

自然現象　カナダを統一する単一の自然現象あるいは自然現象のまとまりがあるわけではない．しかし，いくつかの可能性がある．カナダの地図を見ると，ハドソン湾がカナダを統一するシンボル的な存在であることがわかる．カナダ楯状地は，しばしばカナダの核といわれるが，特にそれがカナダをアメリカ合衆国と明確に分離するという意味では，より可能性のある統一要因である．統一要因としてより頻繁に言われてきた地理的な特徴は，カナダの北方性であり，北部はカナダの強力なシンボルである．北部に対する見方は様々である．16世紀から19世紀にかけて西への航路や北西水路を求めて探検したイギリス人やフランス人の業績は賞賛され，Franklinと彼の探検隊の悲劇的な死が嘆かれた．20世紀に入ってからはグループ・オブ・セブンとして知られる芸術家が，北部の景観の魅力を示すことで，多くのカナダ人の関心を北部カナダに向けさせ，結果として北部がカナダのシンボルになった．今日では，カナダの性格を語るとき，カナダの北方性がよく強調されるが，国家を包括的に統一する要因としての自然現象は，いまひとつ不明瞭で信憑性がない．

現実には，多くの自然現象や条件は，障害物として作用している．アパラチア山脈やカナダ楯状地，そしてコルジレラ山系は東西の交流に大きな障壁となった．大陸氷河や永久凍土，冬季の低温は，北への移動を困難で，高価なものにしている．このような障害と北方の景観が，独特な地域的まとまりを生みだし，そのことがカナダの統一の妨げとなっている．同時に，北アメリカ大陸の主要な地形構造は，カナダとアメリカ合衆国の国境を越えて延びている．このことが，２つの国の国境を越えた地域的結びつきを生みだしており，これがカナダの独立を保つことを困難にしている．確かに，アパラチヤ山脈や五大湖・セントローレンス低地，大平原，コルジレラ山系では，国境を越えても類似しており，双方が密接に結びついている．しかしながら，カナダの主要地域を南北にではなく，東西に結びつける他の自然的要因があり，それらは植生帯であり，土壌帯であり，さらには主要水系である．

偉大な努力　１つの国としてのカナダをつくったのは人間であり，それには偉大な努力がなされた．それの１つがカナダ西部の開拓であった．古くから開発された中央カナダやカナダ東部の州が，カナダの他の地域を開発するための動機と人間と資本を提供した．これによってカナダ太平洋鉄道が建設され，大平原に農地が開かれブリティッシュコロンビアの森林が開発された．これらの偉大な努力は，われわれの遺産となっている，統一のための共通の経験である．

北の次元　カナダの南縁に広がる人口密度の高いエクメネーは，19世紀中頃までに開拓された地域であるが，細長い高度に交流が盛んな地域システムをもっている．大西洋から太平洋に至るこのシ

ステムが，カナダの新しい基盤となった．北のまばらな人口の地域は極めて特徴的な性格をもつが，カナダの地域システムの南北方向の拡張は，従来の東西方向の次元と対をなすものであるが，カナダ人の関心を引くようになったのは最近のことである．

長い間，北部はカナダの忘れられた，あるいは無視されてきた地域である．Franklinの悲劇と探検の神話は色あせてしまっている．北部に住む先住民族は，遠方のエキゾッチクな，移動生活の人々とみなされ，それらはほとんどかえりみられなかった．ごく最近になって，活力のある生活が北部にあることが認識され始めた．北部が国家から注目されるようになったのは，その地域がもっている資源のためである．ベルガー・マッケンジー・バレーのパイプラインが注目をあび，ケベック州の北部ではクリー族が水力発電開発に反対し，イヌイットは自分たちの土地の権利を主張し，そしてthe Royal Commission on Native Peoplesは南部の先住民族を，この北の活力を利用して，覚醒化させようとしている．西部開発のための国家による努力と最近の北部の先住民族の要求に対する認識の両者が，国家の統一の意識を高めることに役だっている．

東西の地理的モーメント　国土を横断する活力のない地域からなる東西の帯を嘆く者もいるが，これがカナダで長い間機能を果たしてきたシステムである．確かに，この東西のコミュニケーションラインと相互関係が，カナダの統一を可能にしてきた．1911年にHalford Mackinderはカナダが1つの国として機能を果たしてきたシステムを，地理的モーメントと呼んだ．この概念によって，彼はカナダにおける力と資本と情報が東西に流れ，この空間的モーメントが国家の統一に大きな役割を果たしていると主張した．

当然のことながらアメリカ合衆国は，カナダに様々で強烈な影響を及ぼしている．しかし，日々の生活は極めてカナダ的である．税金の支払い，郵便制度，教育，健康管理などのすべての業務は，カナダ独特のものである．そして，これらの業務は，地域の中心地に集約され，時には国家の中心のオタワが重要な役割を果たす．これが現実の生活である．Mackinderの地理的モーメントは，基本的には，1つの国の中で複数の地域を結びつけるプロセスを指しており，それは具体的にはトロントーモントリオールーオタワの三角形を中心とし，さらにそこからカナダ全体に広がる都市システムの統一的機能に現れている．

地域的帰属意識と国家的統一　これまでローカルな帰属意識や地域への愛着，直接かかわるコミュニティとの結びつきを人々がいかに重視しているかについて述べてきたが，カナダではこのような地域意識とより広いカナダ人としての意識が両立している．このような地域意識と国家の統一意識の関係は，非常にわかりにくい．

Northrop Fryeは，地域意識と国家の統一意識がどのように関連しているかを説明している．それによると，地域意識は地域のことがらである．それは局地的であり，それぞれの人々が個人的に経験したり理解したりできる領域に限定されている．これに対して，カナダの統一は，国家的なことがらである．国家的統一意識は政治的感情に基づくものである．それは，多くの地域の枠をとりのぞいてできあがった政治組織や法人組織などの事業体によって統一国家ができあがっていくことを意味している．文化は現実には国家全体をまとめるものではない．なぜならば，多くの場合文化は地域的なも

のであるからである．カナダにおいては地域意識と国家意識の間には，緊張感が存在するとFryeは述べている．カナダは広大な性格の異なった地域を含んでいるために，統治するのが非常にむずかしい国である．それゆえに，より広範な国家的関心に至る前に，連邦－州－準州システムを通して，それぞれの地域の調整をはからざるをえない．

個々の人々の役割　最後に，カナダの形成を考えるために，個々の人々の役割につい検討しなければならない．政治的なイデオロギーと政策が，様々な側面に直接的な影響を及ぼしてきた．例えば，経済政策や移民の規制，社会福祉，医療福祉，人権問題，先住民族の生活維持などを含んでいる．しかし，本質的には，カナダの性格や状況は，カナダの住民の力によって生みだされたものである．カナダの多様な地理的な性格は広範な人口的・経済的・行政的プロセスから生みだされたものであり，何世代にもわたって日々の生活をおくるなかでカナダ人が行った何百万もの意思決定によるものである．今日のカナダをつくったのは，そのような人々である．カナダ人は，地域的な意識から次第により大きな全体，すなわちカナダを見通す意識を育てていった．

Ⅳ－4　地域主義とカナダ列島（R. C. Harris, 1998による）

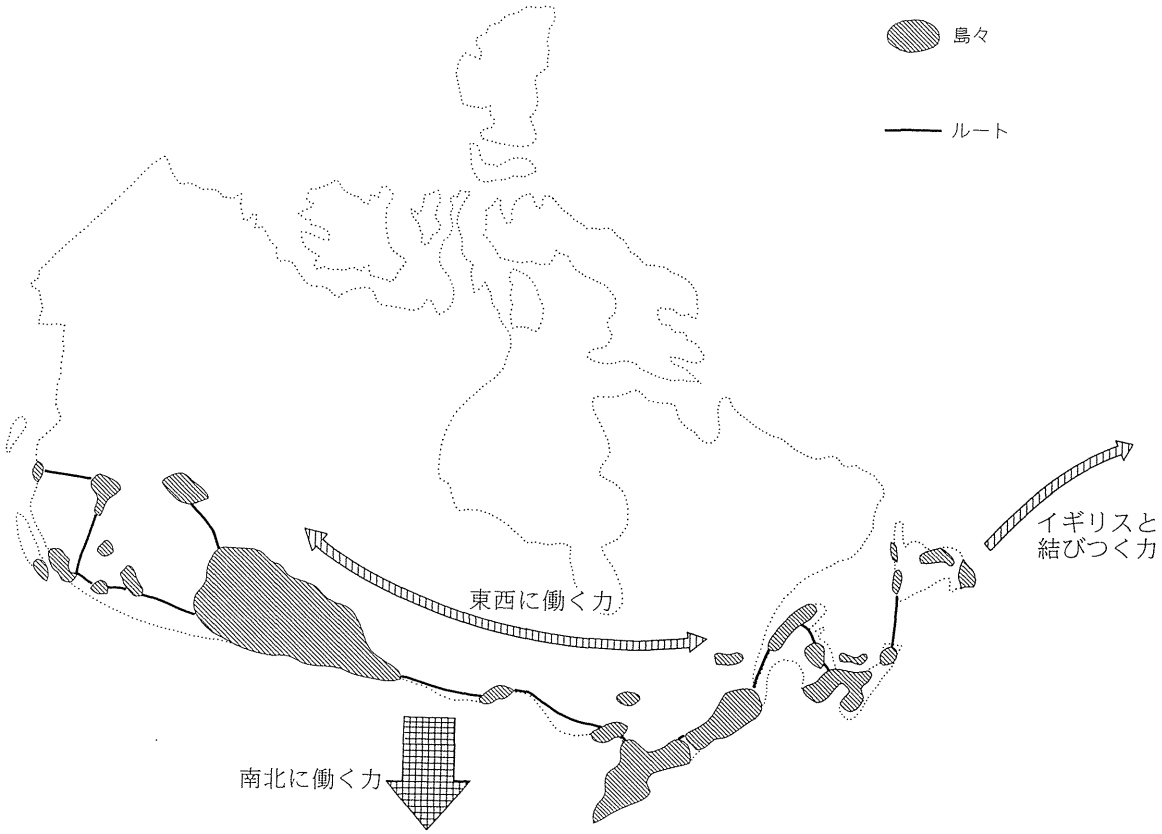
1）カナダ列島の形成

最後に少し長くなるが，Harrisによる*Heartland and Hinterland: A Regional Geography of Canada*の結論部分を要約し，そこで示されている独特なカナダ観を示すことにしよう．Harrisはカナダの性格を独創的な視点から描いている．すなわち，カナダは実質的には大陸国家ではなく，複数の島が集まった「列島」であるという主張である．

カナダは経度で70度，緯度で40度にもわたって広がる巨大な大陸国家である．しかし，晴れた夜にカナダの上空を飛行機で飛ぶと，闇の中に光の島が点在しているように見える．カナダはあたかも島々から成り立つ列島が，東西7,200kmの範囲に広がっているようである．島と島の間は，冬は氷と雪，夏は岩と沼と森林と蝿によって埋め尽くされている．岩石に満たされた空間には通路が設けられており，初期の頃はカヌーによって，次ぎに鉄道，最後は自動車道によって結ばれた（第5図）．

このような状態は，最初にヨーロッパ人がやって来たときにつくられ始めた．漁獲物の方が人間よりも重要であったために取り残され，冬と戦った漁師によってニューファウンドランドが開かれた．ファンディー湾ぞいの低湿地の開拓者によって，アーカディアがつくられた．セントローレンス川下流にはフランス系の人々が主に農村に住み，自給的農業に依存する生活をおくった．南オンタリオでは主としてアイルランドとスコットランドからの移民が，英語を話すプロテスタントの集団をつくった．

このほかにも大西洋岸には，多くの「島々」がつくられた．例えばニューファウンドランドのイギリス人とアイスランド人の島，北部ノバスコシアのスコットランド人の島，ニューブランズウィックやプリンスエドワード島におけるアイルランド人やイングランド人，スコットランド人の島などである．これらの島々では，狭く農業の可能性は限られており，人口が増大するにつれて土地は不足した．そして，開拓前線が岩石のところまで進んだ．余剰人口は北の楯状地へ行くか，南へ向かうかの



第5図　カナダ列島
Harris, C. (1998): *Regionalism and the Canadian Archipelgo*. McCann, L. and Gunn, A. eds., *Heartland and Hinterland: A Geography of Canada*. Prentice-Hall Canada, Scarborough, 395-421. の記述を基に筆者が図化

選択にせまられた．多くの人々は国境を越えて南に行き，アメリカ合衆国に飲み込まれてしまった．

19世紀の終わりにアメリカ合衆国の開拓がほぼ終了し，カナダ西部の開拓が始まった．カナダの大平原は，第1次世界大戦までの短い期間に，カナダ東部やイギリス，中央ヨーロッパ，アメリカ合衆国からの移民によって開拓された．ブリティッシュコロンビアでは，イギリスや大陸ヨーロッパからの移民に，アジアからの移民が混じりあった．

このようにして，不毛な北部とアメリカ合衆国の間に広がる島々が，時期的にも不連続に開拓された．島が満杯になると，人々は南へ移住した．

2）文化の均質性と異質性

アメリカ合衆国は基本的に条件の良い土地であったために，開拓が進み地域が広がるにつれて，もともと異なった人々が均一な文化のなかに統合されていった．カナダでは土地の条件が悪く，このようなことが妨げられた．アメリカ合衆国では開拓が空間的・時間的に連続していたが，カナダではそうではなかった．

しかし，イギリスからやってきた人々も，労働力が貴重で，小農に多くの機会が与えられ，中流

階層が形成されたカナダへ来ると，じきにヨーロッパ人ではなくなってしまった．しかし，イギリス領となった北アメリカの島々は，相互に同じ帝国の一員となり，それぞれが総督や植民地政策を通じて，ヨーロッパの中心であるニューウエストミンスターや王室と結びつき，イギリスをモデルとした政治体制を発展させ，イギリスの軍事力に依存した．

最後に居住者が島を取り囲む岩石に進出し，いくつかの島は合併された．しかしすべての島々の統合は実現せず，カナダの居住地域は相変わらずバラバラで，非連続的である．五大湖・セントローレンス低地が例外的に社会的・政治的に自活するのに十分な密度の人口を擁するが，カナダ自治領の範囲は実質的な地理的単位ではない．

3）カナダの地域主義の地理

Elisee Reclusによると，カナダの行政地図とカナダの居住パターンは一致しない．前者は大陸的で，後者は局地的である．前者は地政学的で，後者は普通の生活空間である．現実には，カナダは多くの島々から成り立っている．列島という視点からすると，局地的な意識が強調されるが，その範囲を越えてより広い領域におよぶ意識もある．ここでは，まず，地域意識の最少の単位から始めることにしよう．

地域社会　カナダの地域意識は州や初期の植民地に根ざしているいるわけではない．人々が住んでいる場所がこれに相当する．このスケールでは，自然も人々もよく知られており，大西洋岸では人々は何世代にもわたって相互に知っている．実態のある世界であり，人々の故郷である．それらは，ニューファウンドランドやノバスコシアでは漁村（outport）であり，ニューブラウンズウィックやプリンスエドワード島では小さな町や農村である．ケベックではレンジ（range）や教区（parish）が，オンタリオではコンセッションライン沿いの農家群やサービスセンターがこれに相当する．さらに，大平原では近隣住区，ブリティッシュコロンビアでは漁業キャンプや林業キャンプ，鉱山キャンプとなる．

都市　ローカルな地域を，次に結びつけるのは都市である．例えば南オンタリオではキングストンや他の湖岸ぞいの町に代わってトロントが発展して，オンタリオ半島を統一するようになった．地域中心都市の発達によって，財や人々，知識などの交流が促され，それによって地域意識の枠組みができあがった．

州　州に対する帰属意識は，フランス系のケベック人の間で最も強い．ケベックはフランス系の人々が大多数を占める最大の政治単位である．ニューファウンドランドはかつては別の自治領であったことがよく認識されている．そのほかでは州に対する意識は弱くなる．オンタリオでは人々は州全体をカナダの中心とみなし，オンタリオというよりはイギリス系カナダという意識がみられる．西部では新しい場所という意識がある．

Central Canadaやthe Maritimesなど　Central Canadaやthe Maritimes，the Prairie，the West，the Northなどは，州を越えるより広い地域であるが，そこに居住している人々はこの名称をつかわず，外部の人々によって使用される．the MaritimesやthePrairieの景観や土地，経済に対する外部からの共通の印象が，ここに住む人々に特別な意味を与える．the West，Central Canada，the Eastと

いう地域名は，漠然とした位置的な意味をもつにすぎない．the Northという言葉は，毛皮交易，希薄な人口，異なった民族にかかわる特別な意味をもっている．

French CanadaとEnglish Canada　French CanadaとEnglish Canadaは，言語に対して用いる場合には明確であるが，地域に対する意識についてはあいまいになる．

最近の変化　さまざまスケールのカナダの地域意識の中で，州の重要性が高まってきている．カナダ自治領成立時には集落がカナダの生活の重要な単位であった．しかし，その後交通やコミュニュケーションの発達によって，集落の孤立性や独自性が失われてきた．このような状況にあって，制度的に決められた権限を持つ州が，かつての集落にとってかわるようになった．

核心地域と後背地域　カナダ全体で考える場合，カナダは産業技術があってはじめて存在することを認識しなければならない．産業技術は広大な地域の莫大な産物を１つの市場に統一する力をもっている．大都市には経済が集積し，他方，豊かな資源をもつ広大な後背地が広がる．関税によってアメリカ合衆国から守られ，核心地域が五大湖・セントローレンス低地に発達し，残りの地域は，核心から供給される工業製品を消費するかわりにそこへ原料を供給する後背地となった．核心地域は他の地域に対して，屈託のない包容力のある態度でのぞみ，周辺地域は核心地域に対して邪推的態度でのぞむ．ただし核心地域がすべて屈託がなく，包容力があるかといえばそうではなく，フランス系カナダ人の場合は異なっている．

ロイヤリストの伝統と北への使命　中心部の英語を話す人々にとって，海から海にいたるイギリス領北アメリカは，正当なものである．この考えはロイヤリストの伝統に根づくものである．イギリスの政治的伝統の上にたつと，アメリカ合衆国に対しては常に不安をいだかざるをえない．これが大陸国家をつくらせた動機である．

このような感情は今日まで続いている．しかし時がたっにつれて，カナダが北の国であり，北を開発するという使命をもっているという考えがでてきた．これによってすべてのカナダを統一することができる．このような「北方性」の発見はグループ・オブ・セブンやHarold Innisなどによって示されている．このような視点は，居住地というカナダの島々間隙を埋めるものである．

V　む　す　び

この報告は，カナダ地誌作成のための第一段階として，カナダの地域性について検討したものである．カナダを取り上げる理由としては日本ではカナダに関する情報が不足しているか偏っていること，歴史が浅く，人口が少なく，自然環境が厳しく，さらに国際的競合にさらされてきたことから，様々な現象が明確に現れ，地誌学研究においてモデル的な意味をもつものと考えられたからである．具体的には，日本の高等学校と中学校の地理の教科書の記述から，カナダの一般的な性格について探った．それらの性格について，個別に検討し，さらに最近のカナダにおけるカナダ地誌の成果から，カナダの地域性ををまとめることにした．

教科書ではアメリカ合衆国や中国，オーストラリアのように大きく取り上げられることがないのがカナダで，ここにもカナダに対する認識の低さが示されている．部分的な記述から，カナダの一般的

な性格を整理すると，(1) 物理的大国，(2) 豊かな自然と天然資源・農産物，(3) 北方の国，(4) 少ない人口，(5) 複雑な民族国家，(6) 経済的先進国，(7) 都市化社会，(8) 平和な国，(9) 短い歴史，(10) 大きな地域格差，(11) アメリカ合衆国との密接な関係—南北に働く力—，(12) カナダの独自性—東西に働く力—などになる．これらを検討すると，それぞれが多面的な意味をもっていることが理解できる．例えば，国土が広いという物理的大国は，生産性が低い広大な土地を含むことから，必ずしも大国の条件とはならないということや，北方の国というのは寒冷な北国という意味のほかに，北の文化を創造するという国家目標に関係していることがわかった．

最後に，最近のカナダ地誌はいずれも，カナダを多様で相互に異なった複数の地域をを含む1つの国家と捉えていることがわかった．カナダは広大な領域をもつ大陸国家であるが，内実は多くの小さな島々が連なった列島であるというHarrisの指摘はまことに当を得ているといえよう．Warkintinは性格の違いをもつ地域を統合する要因として，北方性という自然的要因と西部開発にみられる歴史的な開発の努力，北部への発展の意義，東西を結びつける力，地域意識と国家意識の並立，そして個々のカナダ人の力をあげている．また，Boneが整理した先住民と非先住民，フランス系住民とイギリス系住民，中央主義者と非中央主義者，そして新参者と非新参者という4つの断層（Faultline）はカナダをそれぞれの地域に分断させるものではなく，カナダ全体の性格を形づくる役割を果たしている．

この小論を本年度をもって定年退職される斎藤功先生に，長年のご指導とご厚誼に感謝して献呈いたします。この報告をまとめるにあたって，カナダ，グウェルフ大学のP. Keddy名誉教授とグウェルフロータリークラブのD. Kennedy夫妻をはじめとする多くのカナダの方々にお世話になった．また，地理の教科書分析については，筑波大学大学院人間総合科学研究科の井田仁康助教授から貴重な助言を得，付図の製図は筑波大学地球科学系の宮坂和人技術職員に，英文要旨の校閲はカナダ，トンプソンリバーズ大学のT. Waldichuk助教授に依頼した．記して感謝申しあげる．なお，本報告の執筆中にKennedy夫人の訃報に接したことは痛恨のきわみである．筆者がロータリー財団の奨学金を得て1979年夏にカナダを初めて訪れてから今日に至るまでの変わらぬご厚誼に感謝するとともに，心からご冥福をお祈りするしだいである．

参考文献

綾部恒雄（2003）：多文化主義の成立と苦悩－国民国家の中の民族と言語－．綾部恒雄・飯野正子編：『カナダ知るための60章』明石書店，186-194.

東　良三（1969）：『カナダという国』宝文館出版，262p.

石田龍次郎編（1959）：『現代地理体系第三部　世界地誌第七巻　北アメリカ』古今書院，438p.

岩崎美紀子（1995）：カナダ連邦制．地方自治，**571**，42-57.

木村和男（1991）：『連邦結成－カナダの試練』日本放送協会，238p.

ケアレス，J.M.S.著，清水　博・大原祐子訳（1978）：『カナダの歴史－大地・民族・国家』山川出版，460p.

島崎博文（1994）：『カナダの土地と人々』古今書院，292p.

田林　明（2004）：カナダの核心地域としての南オンタリオ．金田章裕・藤井　正編：『散村・小都市群地域の動態と構造』京都大学学術出版会，301-314.

ハーツホーン著，野村正七訳（1957）：『ハーツホーン　地理学方法論－地理学の性格－』朝倉書店，583p.

プェルトナー著，木村寿夫訳（1981）：『ヴァイキング・サガ』法政大学出版会，500p.

正井泰夫（1985）：『アメリカとカナダの風土－日本的視点－』二宮書店，151p.

文部科学省（1999）：『高等学校学習指導要領解説地理

歴史編』実教出版，336p.
文部省（1989）：『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』実教出版，324p.
山口岳志編（1983a）：『週間朝日百科世界の地理 8 アングロアメリカ　カナダ－東部・大西洋岸』朝日新聞社，28p.
山口岳志編（1983b）：『週間朝日百科世界の地理 9 アングロアメリカ　カナダ－中部・北部・太平洋岸』朝日新聞社，28p.
山本武夫（1976）：『気候の語る日本の歴史』そしえて，238p.
ライシャワー，E. O.著，国弘正雄訳（1979）：『ザ・ジャパニーズ』文藝春秋，437p.
渡辺　光編（1980）：『世界地理13　アングロアメリカ』朝倉書店，504p.
Bone, R.M. (2000): *The Regional Geography of Canada*. Oxford University Press Canada. Don Mills, 507p.
Bone, R. M. (2005): *The Regional Geography of Canada, Third Edition*. Oxford University Press Canada, Don Mills, 572p.
Harris, R. C. (1966): *The Seigneurial System in Early Canada*. The University of Wisconsin Press, Madison, 247p.
Harris, R. C. (1998): Regionalism and the Canadian archipelago. McCann, L. D. and Gunn, A. M. eds., *Heartland and Hinterland: A Regional Geography of Canada, Third Edition*. Prentice Hall Canada, Scaborough, 395-421.
Harris, C. and Warkentin, J. (1979): *Canada before Confederation: A Study in Historical Geography*. Oxford University Press, London, 338p.
McCann, L.D. eds. (1982): *Heartland and Hinterland: A Regional Geography of Canada*. Prentice Hall Canada, Scaborough, 500p.
McCann, L.D. and Gunn, A.M. eds. (1998): *Heartland and Hinterland: A Regional Geography of Canada, Third Edition*. Prentice Hall Canada, Scaborough, 439p.
Paterson, J.H. (1989): *North America: A Geography of the United States and Canada, Eighth Edition*. Oxford University Press, New Nork, 528p.
Putnam, D.F. and Putnam, R.G. (1979): *Canada: A Regional Analysis (Revised Metric Edition)*. J.M. Dent and Sons (Canada), Toronto, 406p.
Robinson, J.L. (1989): *Concepts and Themes in the Regional Geography of Canada*. Talonbooks, Vancouver, 272p.
Warkintin, J, ed. (1968): *Canada -A Geographical Interpretation-*. Methuen, Toronto, 608p.
Warkintin, J. (2000): *A Regional Geography of Canada*. Prentice Hall Canada, Scarborough, 640p.
Watkins, M. H. (1963): A staple theory of economic growth. *The Canadian Journal of Economics and Political Sciences*, **29**-3, 141-158

Regional Characteristics of Canada

TABAYASHI Akira

"The knowledge explosion of recent decades provides too many facts about any part of the world for the human brain to comprehend the totality of any region. A regional geographer must, therefore, develop the art of selecting information and the skill of describing which characterize developments and identify trends in certain regions" (Robinson, 1989, pp.13-14). The objective of this paper is to discuss the regional characteristics of Canada as a first step for my plan to compile a regional geography of Canada. There are mainly two reasons to deal with Canada. The first is that there is a lack of information about Canada in Japan and that which exists is unbalanced. In addition, if one compares Canada with other older countries such as Japan, China and Western European countries, clearer regional overviews of Canada's geography have been written in English. Its regional features are not complicated and seem to be rather easily explained because of its short written history, small population, and its harsh physical environment. Therefore, the methods used to describe the regional geography of Canada could be used to develop clearer overviews of the regional geography of Japan and other older countries.

An analysis of the descriptions about Canada in geography textbooks for high school and junior high school students in Japan was pursued to find out how the general features of Canada are represented in Japanese textbooks. Then, I compared these features with the representations found in four recent regional geography books on Canada that were written by Canadians.

The geography school textbooks in Japan have given a great deal of space to the United States of America, China and Australia, whereas little space is given to Canada. Canada is characterized in Japanese textbooks as (1) having a huge territory, (2) having abundant natural resources and agricultural products, (3) being a northern country, (4) having small population, (5) having a complicated racial composition, (6) having an advanced economy, (7) being composed primarily of an urban society, (8) having a peaceful atmosphere, (9) having a short written history, (10) having large regional disparities, (11) having a close relationships to the United States of America, and (12) having a strong desire to be an independent country.

Recent regional geographical books suggest that Canada is a country of regions. "Canada is a continental giant, but actually it is an island archipelgo spread over 7200 kilometres from east to west "(Harris, 1989, p.395). Robinson (1989, p.271) suggests that "Canada is a uniform political region only to people and other countries outside of Canada, and Canadians know that this is not true". On the other hand, Bone (2005, pp.543-544) says that "since Canada became a nation, four major faultlines (English-speaking /French-speaking Canadians, centralists and decentralists, new and old Canadians, and Aboriginal/non-Aboriginal Canadians) have played an important role in its evolution. However, Canada's faultlines, rather than dividing the country, have managed to unite its different regions and people". As Warkintin (2000, p.611) concluded, "from their regional perspectives Canadians have generally been prepared to look to the much larger whole that is Canada, and grasp the challenge of its larger unity."

Key words: Canada, regional geography, regional characteristics, regionalism, Canadian archipelago